



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター一年報

2013

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2013』目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1
<小論文>			
学生自身の生き方を問う「生徒・進路指導論」の授業 ～児童生徒の葛藤に寄り添うために～	非常勤講師	南 悟	2
G.H. ノイヴェークにおける<知識/技量>の意味論 ——教員養成における<理論/実践>問題の手がかりとして——	非常勤講師	山名 淳	11
小学校家庭科教育の課題と学校教育上の位置	文学部教授	山本 冬彦	21
<報告>			
関西大学「教職概説」の一クラスにおける学生たちの教科の好き嫌い	非常勤講師	池上 徹	31
「教育実習・教職実践演習・教育実習事前指導」についての報告	非常勤講師	尾崎 進	37
体罰問題をどう扱うか—学生の経験と意見より—	非常勤講師	保田 その	42
<ショートレポート>			
「多文化主義」教育の現在	非常勤講師	印藤 和寛	48
学校映画のすすめ	非常勤講師	椎口 育郎	55
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科			58
介護等体験 参加者数			60
中学校・高等学校教育実習生数			61
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧			62
教員採用試験合格者状況・合格者数			69
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果			72
教員採用試験 試験日・合格発表日等			73
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～			75
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について			76
介護等体験事前指導について			78
本学卒業新任教員の方々との情報交換会について			79
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について			80
教員養成フォーラムについて			82
教員採用試験合格者との情報交換会について			84
教職専門科目担当者研究会について			86
教員採用試験合格者壮行会について			87
教職に関する専門教育科目担任者一覧			88
教育実習出向指導校一覧			94
教職支援センター 利用状況			96
教員免許状更新講習一覧			98
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領			99
教職支援センター委員会委員名簿			101
教職支援センター規程			103

「教育実習・教職実践演習・教育実習事前指導」についての報告

関西大学非常勤講師 尾崎 進

本講義は教職に関心がある学生の受講ではあるが、その取り組む姿勢にはかなりの差があるのは、一般に理解できることだろう。まず、受講状況について報告する。出席に関しては、3回生の「事前指導」では全欠1名を除き、欠席率は0.65(15回中40名欠席総数26回[遅刻3回1欠席を含む]) 4回生の「直前指導」では、0.41(9回中41名欠席総数17回[遅刻前述同様扱い)、「教育実践演習」では、全欠1名除くと欠席率は1.1(15回中36名欠席総数40回[遅刻前述同様扱い)となった。欠席等は同じ学生に集中する傾向にあることや、4回生では後期の学生状況を考慮すると、概して出席率は良好といえるのではないかとと思われる。

初回は、オリエンテーションとして、教職全般に関しての各自の課題を掘り起こすことに重点を絞った。現時点での学校現場での諸課題を挙げ、当事者として学生に問題提起し、どう準備しておくかについて考えさせた。

そのための工夫として、大きく以下の点に留意を促した。

- ① 一斉授業ではなく、授業形態をグループごとに行う。
- ② 討議・検討すべきテーマはグループで決める。
- ③ 理数系の学生としての従来の授業のように真理・正解を求めるものではない。
- ④ テーマごとの自らの意見を持ち、他の意見、客観的な事実等をもとにグループとしての意見をまとめる。
- ⑤ 司会・記録・発表の役割を決め、記録者がグループの了解の元、連名の記録を提出。発表者が前で発表をする。発表者は何故そうまとめたかを論理的に伝える。
- ⑥ 各グループは2・3回ほどの討議後、異なる役割やメンバーへと移動する。

討議にあたりアイシングとして、自己紹介(目指す将来像・趣味など)を3分程度と次者は前の人の話を聞いたところを何かほめるように支持して実施した。思いの他、学生同士、お互いを意外と知らない面が多く、新鮮だったようだ。まずは、討議する雰囲気づくりはできたと思われた。しかし、上記の点を強調したため、座席への指示が大まかになり、学生にとっては戸惑いがあったようだった。後のアンケート結果をみると、座席については、どうしても仲間内で集まりがちであるので、細かく指示しなければ、雑談に終わってしまうとの指摘があった。4回生であっても学生自らが、こちらの意をくんで行動するには、かなりの時間を要するというのを痛感した次第である。

④の準備として、事前に課題を課しレポートを作成させた。自らの保存のためにも電子データ化するよう指示したが、手書きでの提出が多い上に、文章も書き馴れていない状況がうかがえた。しっかり取り組む姿勢よりとりあえず、目先を無難に「こなす力」の面が強かったのではないかとと思われる。自らの考えを変容させることの大切さについては、気づきが浅いようだ。

グループの意見をまとめるということについては、その難しさを体験することとなったが、結果としてグループの意見を差しさわりのない無難なものにまとめる傾向が強く出ていた（人間関係の弱さか）。他者の意見と自らの意見、客観的事実のもとで「折り合うところ」「落としどころ」を探すという練習であることを強調したが、その経験知が乏しいといわざるを得ない。学生にはこの言葉が十分に理解を得られず、実感がなくどのようなものか興味を引き「折り合う」「落としどころ」という言葉を繰り返し口にしていたのには驚きだった。

2回目以降は、主な点だけ以下に記す。

自らが目指す「教員像」では、生徒の信頼関係や安心感を与えることや生徒に寄り添い、共に成長したいと考える（以下提出レポートから）学生がほとんどであったが、面白い（興味の持てる）授業ができる・叱ることのできる・自主性を伸ばすなどが付随されていることが多くあった。学生がまとめた教師像のキーワードには、信頼関係・三配り（気配り・目配り、心配り）・当たり前を実行・寄り添い・学ぶ姿勢などがあげられた。これらは、学習指導面や生徒育成面を考えてのことだと思われる。ただ、生徒の質は多様で、不安感も感じられ、これからの教員としての自信のなさとして現れる面もうかがえた。

次に、社会から求められる「教員の能力」について議論を交わしてもらった。ここではまず「教員に求められる4つの力」を提示した。これを踏まえ、社会人としてのモラルや生活面についての意見を求めたが、学生からはすぐには何も出てこなかった。マネジメント力が希薄であり、成績等の事務処理能力といった点も思いつかない様子であった。現場での教員の実際の仕事が見えてこないのであろう。いかにマネジメント力を発揮するのか、地域の取り組みや特活、総合的な学習の時間をどのように計画するのか、具体的な事例をあげなければ、思いつかない様子だった。ましてや創造性や先見性の力という視点は、いうまでもない。「なぜ教育改革が必要か、なぜ英語力が問われるか」と質問しても、学生からは反応がみられない。実際、教員に求められる「能力」は、多岐に及び不足なところをよく自覚している。言葉の上では、全く抵抗なく、受け入れが早い面では、学校現場においてはなかなか進まない、「チームとして取り組む」という教師同士の補完関係に共感を強くすることがあげられる。学生が現場でいかに即戦力となるかは、受け入れる現場の力如何によるところが大きい。実習先の教員の多忙さを目の当たりに接し、指導教員に相談したいこともできなかったという報告からは、時間的なゆとりがない現場の状況がうかがえるが、現場における新人養成が「鍵」となっているといえよう。

学生が考えた理想の学校像では、ユニークなものもあった。様々な立場の人とつながりができる学校・生徒も先生もゆとりのある学校など、学生生活での経験が活かされた面であろう。その他、生徒のビジョンが最大限尊重された学校、メリハリのある学校（授業との切り替えなど）、生徒の様々な可能性を育てる学校、地域・保護者・教師のつながりの強い学校など……。新たな行事や交流の場を企画することや、教員を増やして教員が協力していい環境をつくるなど、多岐にわたる討議ができた。

自らの課題について班で議論したところ、対人関係・叱ることのできる人生経験・感情のコントロール・聞き上手・自らを磨く・生徒等の受け答えの対応などがあげられた。学校の課題まで発展しないのは、経験がないがゆえ致し方ないであろう。

いじめ・体罰事象の問題では、事例をあげながら討議を進めた。最新の新聞記事等(学生は新聞は読んでいない)を参考にし、正邪の二極化をできるだけ避けるようにした。いじめについての課題では、自ら被害者となった経験を事前レポートに記す学生もいて、議論は活発に交わされた反面、まとめることに困難をきたしていた。「課題いじめへの対応について考えよう」(教職実践演習ワークブックから抜粋)などから一通りの対応策は示したが、各グループでのまとめは、進行役にゆだねられるところが大きかった。ネット・メール等へと議論は深刻さを増し、これだという解決策に思い浮かばないものの、議論する必要性についてはどの班も共通していた。身近なところで、どこでも起こりうる問題であることが学生に実感されてきた様子がかがえた。体罰に関しては、容認する班もあり、発表者が戸惑いながら相談に来ることもあった。繰り返される体罰の記事を見ても、体罰を肯定的にとらえる学生が多くいたのには驚いた。教員と生徒の立場の違い、体罰をしてまで指導したい事柄とは何か・・・、できるだけ事例をあげ議論を続けた。しかし、教員と生徒の信頼関係があれば大丈夫と考える学生もいて、根の深さを学生にも理解できたことだと思われる。

次に、DVD(2013年3月25日NHK放送分「泣き笑い 俺たちと先生の就職活動～西成高校・生きる力をはぐくむ1年～」)視聴した。次第に画面に食い入る様に見だした学生の反応は予想以上に大きかった。まず、ほとんどの学生が、教員が生徒の就職のため会社訪問をすることを知らなかった。自らの学校経験の違いを痛切にあげ、教員の仕事として驚いていたのが印象的であった。学生はまさに「目からうろこ状態」と言っていたが、彼らには未知のことで、自分の経験からはとても想像つかないといった様子で現場への不安に陥っていた。生徒の振る舞いや、それに受け答えする先生の対応に驚嘆し、いろんな事情の生徒の出演には、言葉を失うぐらいの衝撃を受けていた。この様子はレポートや発表からも十分伝わってきた。授業だけで学生の心揺さぶる困難さを思えば、百聞は一見にしかず、生活体験の乏しい学生にとっては、こうした企画は是非とも必要であることを再認識した。

後半も過ぎ、3回生には模擬授業の準備に、授業評価、使ってはいけない言葉、取ってはいけない態度、やる気のない生徒への接し方など討議し、まとめさせた。教科指導案のレポートから、自薦で2名を選び、模擬授業を行ったが、4回生と違い、まだまだ真剣度に差があった。生徒への発問等を誤解してか、学生同士の受け狙いが目立ち、妙に盛り上がったりにしてしまった。模擬授業の設定から繰り返し、前述のワークブックを利用し議論を深めたが、これからの課題となった。特に4回生の実習を終えた学生からは、「どのレベルの生徒に合わせて授業を行うか」「教員と生徒の距離感をいかにとるか」「いかに叱るか」といった実践的な内容が出たことと比べれば、その差は歴然としている。

講義回数も残りわずかとなり、教員として押さえておきたいこととして、人権教育について触れることにした。人権としての事象を学生に発問を繰り返したが、問題の重さからだけではなく、ほとんどその知識がないことからか、反応が鈍い。事前に「今まで受けてきた人権教育について」のレポートを提出させていたので、ここから、民族・部落同和・ジェンダー・子ども・障がい者・病気(ハンセン病・HIV感染・放射能など)・ホームレス関係などをあげることができた。彼らは小・中・高校では特に教わってないと言い、せい

ぜい映画鑑賞ぐらいで、体育館で当事者の講演をあげる学生はわずかであった。大学で初めて講義で当事者からの話を聞き、差別事象を知ったという学生が殆どであった。議論を進めるため、その一週間内にでた新聞記事の「と畜の日常」から始めた(再三取り上げているが学生は殆ど新聞も読まない)。そして差別落書き、就職差別、結婚差別など彼らがこれから直面するであろう話へと深め、当事者としての対策等を討議した。次回には列挙した中から関心のあるものをレポートしてくるよう指示し、次回の議論の準備とした。中には、自らの経験を記す学生が出てきたり、振り返れば思い当たるところもあるなど、地区の存在や本名推奨などカムアウトを言う学生もでてきたりした。経験がないとはいえ、考え方の違いを認めることについては、積極的に受け入れようとする姿勢には、安堵感を持つことができた。学生自身も、しっかりした価値基準を身につける必要性を感じているようであった。

最後には、就職を目前に控えた4回生の状況も考え、社会人として求められる人物像について議論させた。職業人と教員像との共通面として、能力、収入面や多忙さ、やりがいなど、人間としての成長などを対比させるなどして議論を進めた。4回生は11月のフォーラムで経験していたので、3回生には最後の授業に本学卒業生の現職教師(私の知人)が学校休暇時に来校し(30分ほどB4両面に教員としての自らの経験を記したプリントを配布)、教員を目指す学生に必要な話をしてもらった。終了後、学生から多くの質問を受け、その熱心さに感激した程であったが、学生には現場の先生と直接接する機会がもてたことは好評であった。

以上、概略的な経過となったが、まとめを含め特記すべき点を挙げてみる。

授業として討議が新鮮であったとの回答が多くあった。「教育についての様々なテーマをこんなに長く今までなかったのに役に立った。特に反対意見や自分と違う意見でも理由を聞いてなるほどと思うものもあり、それらをまとめて一つの意見にする作業はこれから特に必要だと思った。」「いじめ・体罰・人権などの問題について真剣に考えたことがありませんでした。これらの問題を真剣に考える時間が得られ、この授業はとても為になりました。また他の人がどう考えているかを知る機会を作ってもらい自分の考えの幅が広がりました。」「社会にでる上でも自分の課題をしっかりと把握し、ちゃんと向き合うことは大切だと思います。この講義では、教育のこと以外にもそういった姿勢を身につけ、考えさせられました。」などと記す学生も多くいて当初の狙いは達成できたと思われる。

理系の授業には、討議形式が少なかったことや、いわゆる真理を探究しようという意識が強いせいか、多面的・多様な意見のまとめが不慣れではあった。ほとんどの学生が同様に自分と違う考えを知る機会となったと肯定的にとらえていた。ただ、結論を早く引き出してしまい、途中経過の重要性や意義が理解できない学生もいた。補足として、前期(計6回)の授業では、模擬授業の中で、まわりからの意見を参考にし、自らの良さや課題をとらえることができたのか、ほとんどの学生が「前期の講義もよかった」とアンケート結果から伺えた。(前期の記載者のみだが、この講義を受けて、あまり良くなかった1名、良かった17名。内容については、あまり良くなかった4名、現場のことをもっと聞きたかったなど、良かった11名、実習に事前に学んでいたのを活かしたなど)改善を望まれたのは、数名程度となるが、欠席後を含め講義後配布物を見ても、内容がわかりにくいとか、取り

上げる事象やテーマが多すぎ、もっと時間をかけて、説明や討議をしてもらいたかったなどであった。具体には「ADHD」や「電話等の対応」との詳細な説明がほしかったなどとあった。今後の課題として取り上げていきたい。

学生へのアンケートで気になったのは、活字離れである。月に一冊以上本を読む学生は数名にとどまり、1年でも1/3程度にとどまる。学校現場では、実習校に訪問した際にも教員の多忙を指摘していた。実習後の振り返り会が実施されたとき、担当指導教官のアドバイスはなかなか出てこない。こちらから気になった点をあげると、同様の指摘をされ、次々と厳しい改善点も挙げてもらえることがあった。実習生に時間がかけられない状況を聞くと、直接に実習生へ指示することの遠慮もあると言われたりもする。受講学生の新聞や読書などの機会の減少している状況の元、現場で自立した教員に育つことを考え合わせると危惧を覚える。新任教員は直面する課題に、限られた情報で対応する恐れが増えていることを申し添え報告といたします。